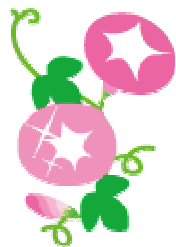


いそファミ通信

7月号



一宮市では、現在、胃がん、肺がん、大腸がんについてがん検診がおこなわれています。

なかでも大腸がんは食事の欧米化、とくに動物性脂肪や蛋白質の過剰摂取などにより急速に増加しており、日本では女性のがんの死亡率の1位を占め、2020年には男性でも2位に上昇すると予想されています。

日本人では直腸とS状結腸に多く発生します。罹患の頻度は60代がいちばん多く、70代、50代と続きます。

大腸がんの発生原因はまだわかりませんが、疫学を中心とした研究から、大腸がんの発生は欧米食の特徴である高脂肪、高蛋白かつ低繊維成分の食事と正の相関関係にあり、生活様式が強く関係していることが明らかになっています。

早期の大腸がんではほとんど自覚症状はなく、大腸がん検診や人間ドックなどの**便潜血検査**で見つかることがほとんどです。

がんの進行に伴い、がんにより形成された潰瘍病変からの出血によって起こる下血・血便(出血が便に混ざること)・貧血と、がんの発育により腸管の内側が狭くなることによって起こる便秘・下痢・腹痛・通過障害(腸閉塞)などが挙げられます。

特に血便は、痔と勘違いして受診が遅れるケースがあるため、注意が必要です。



【便潜血検査】

大腸がんでは、血管が豊富な腫瘍から、また腫瘍の一部に潰瘍ができてその潰瘍から出血する場合があります。このような場合、排便時にその部分がこすられて、便に血液が混入します。この便中に混じったわずかな血液を検出するのが、便潜血検査です。

便潜血検査では、血液中に存在するヘモグロビンというタンパク質を検出します。ヘモグロビンは、高い温度の中や、時間がたつにつれて、壊れてしまうという不安定な性質を持っています。このため、正確な検査結果を得るために、採取した便はできるだけ早く専用の容器に入れて冷蔵庫などの冷暗所に保管し、2日分の便を取ったら早めに提出する必要があります。また、血液は便の中に均一に混じっているわけではありません。専用のスティックで便の表面のあちこちをまんべんなく少しずつこすり取ることで、より正確な結果が得られます。

絶対確実なものではありませんが、厚生労働省が実施した疫学調査では、便潜血検査を受診した人はしない人に比べて、大腸がんで亡くなる危険性が低いという結果が得られています。



大腸がんは早期に発見できれば、そのほとんどが内視鏡的に、または外科的に根治可能な病気です。早期大腸がんの5年生存率は80%以上と極めてよく、進行がんでもがんの浸潤の程度とリンパ節転移の程度により予後が変わってきます。また、大腸がんは肝臓にいちばん転移しやすいのですが、肝臓転移が見つかって、肝臓を手術したり抗がん薬を注入したりして長期に生存することも可能です。

40歳を過ぎたら、症状がないうちに大腸がんの検診を受けるようにしましょう。また、血便や便通異常などの症状がみられたら、すぐに専門医で検査を受けるようにしてください。